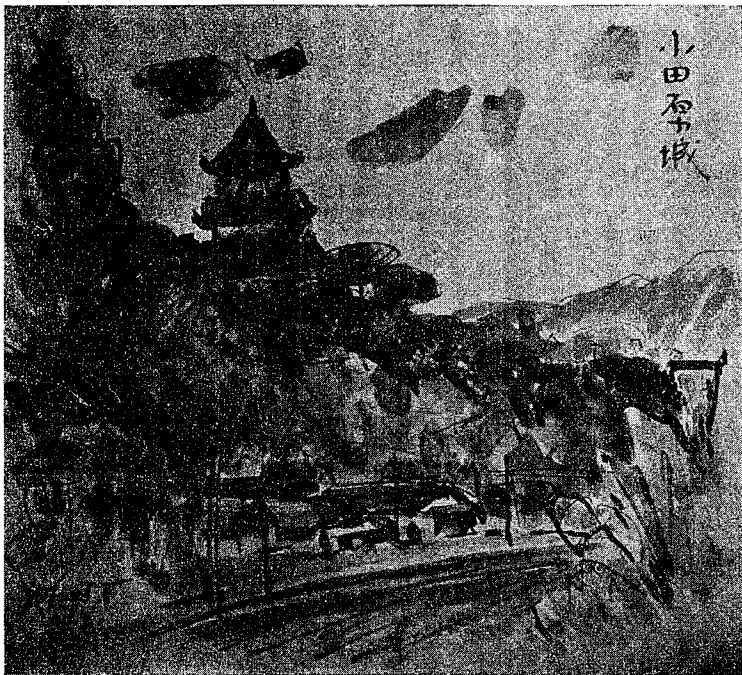


小田原史談

第21号
発行所 小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館内



青橋方面より見たる天守閣
本年五月駅前八小堂書店階上において個展を開いた洋画家高杉洋助画伯の陳列の内品水彩画より

生きている

小田原城

小田原城は現代においてなお生きている。

天守閣が原型によって再建せられてから三年、小田原は箱根の表玄関と云われるようになり、東西より集る観光客は必、駐って天守閣に登るのを常とする。従来通過駅として素通りされた小田原は、いまは観光の目的地として知られるようになった。

北条早雲が明応四年小田原に居城を構え、五代相継いて関八州を鎮めて、一寒村に過ぎなかつた小田原は一躍有名となり、市街を形成して商工道の盛んなるに到ったことはみな人の知るところである。

箱根を目捷に、互相の連山と相模灘を眼下に眺めて、早雲の雄図をしのぶとき、自ら気宇宏大に雄心の湧き出するを覚ゆる。

天守閣は、観光において一役買っているのみでなく、現代に受け入れられるあらゆるアイデアを市民に与えている。四百年前の早雲の副業が、現代に伝える多くの示唆をわれわれに与えることを、明確に把握したい。

小田原城は現代において正しく生きているのである

小田原城懐古 斐田 天峰

英雄創業鎮関東 五世興亡一夢中
此地遊人多感慨 古墳荒草有秋風

(録旧作)

第二十一号 目次

題字	会長 鈴木 十郎 1
水彩画 天守閣	洋画家高杉洋助 1
巻頭言 小田原城	斐田 長平 1
真説曾我兄弟追記	中野敬次郎 2
一枚琴考	今田 無極 4
足柄平野農耕はか	内田 武雄 6
伝馬制度と税金	清水専吉郎 7
小田原三者考	志波 太生 7
鉄道記念物	額田喜代春 8
山の隨筆より	8
文苑・画家紹介	9
箱根の望湖詩碑	10
会の発展策について	斐田 長平 10
編集後記・広告	11
広告	12

お断り

編集者の都合にて四月以降四ヶ月分を合冊として発行しました。御諒承を乞う。



真説曾我兄弟追記 (十三)

中野 敬次郎

曾我兄弟の遺跡を訪う

一、伊豆の国は曾我兄弟誕生の地

伊豆急行に乗って伊豆の東海岸を南下して行くと、終点下田駅の少し手前に河津駅があって、ここに下車すると付近に多数の温泉場がある。今井浜・峰・谷津・湯が野・小鍋の四つの温泉場が集合して、これを河津温泉郷と称し、南豆温泉の中心で、近年發展はめざましい。曾我兄弟の生れた河津の庄がここであった。河津の庄は、平安末期から鎌倉初期にかけて伊東氏の嫡子の代々の拠り地であった。伊東祐親が壮年期までここに住んだので、兄弟の実父祐泰も、伯父の伊東九郎祐清も、また伯母におたる三浦義澄夫人、北条時政夫人、小早川遠平夫人、源頼朝の若き日の愛人八重姫なども皆ここで生れた由緒の地である。

○河津館の趾。河津の庄は後に上河津・下河津・稲取・奈良本の四村に分れたが、下河津の谷津というところに館内(たてうち)という地名があって、祐泰が父の跡を継いで河津三郎と名乗って住んだ屋敷跡だと伝えられている。伊東祐親はここに住んで河津次郎と称し、嫡男祐泰は父の跡をうけて住んで河津三郎と号した。そしてその長男十郎祐成(幼名一万丸)は承安二年(一一七二年)に、次男五郎時致(幼名箱玉丸)は承安四年(一一七四年)この居館に誕生した。しかし、今は地名のみ残って居館の規模は不明である。

○河津八幡神社と称念寺
館内(たてうち)の中にある河津八幡神社は、もと河津氏の居館内に祀られた同氏の氏神で、天児屋根命を主神として奉祀していたが、後世に河津祐泰と曾我兄弟を合祀し、今は下河津の郷社になっている。社前に九十貫あるという大きな「河津三郎の手玉石」と言うものがある。

て、祐泰が少年時代にこれを持ちあげ、これを投擲して力量をためたとはいへない。祐泰は後に安元二年の伊豆奥野の山符の際の大相撲で七十五人力という股野五郎を二回も投げ飛ばして無双絶倫の力量を示したが、その時用いた足掛けの技は、今でも「河津掛け」という名が残っているが、手玉石もそのようなところから伝説が生れたのであろう。

神社の側に称念庵の跡がある。河津祐泰が谷津の居館の城内に一字を建てて氏寺とし、春日縁起の阿弥陀仏を安置して守本尊としたものの跡で、後に永祿年間(山崩れがあったので下河津の浜に移して称念寺と号したものが現存する。河津祐泰の靈碑を収めている。現在の寺は善土宗増上寺末で宝林山称念寺と言う。

○河津三郎の血縁と椎木三本
伊東市から下田街道を南に向って八軒許り、バスで四十分五分赤坂で下車する地名では伊東市赤沢というところ、血縁入口を旧道へ半軒あまり入ると、河津三郎の血縁というのがある。安元二年十月十日の夕暮に、祐泰が伊豆奥野の狩場から河津の館に帰る途中を、工藤祐経の家臣大見小藤太、八幡三郎の二人のために遠矢をかけられた悲業の最後を遂げたところである。赤沢山の麓道路の崖下に柵で囲まれた方形と円形の二個の石塔と石碑とがある。

血縁の真裏の山腹に暗殺者二人が隠れていたという椎木三本というのがある。一本の椎の大樹の分れて三岐をなしているものである。この事件が原因となって十八年後の富士の裾野における曾我兄弟の仇討となったのであるが、非業にたおれた祐泰は、時に三十二才の壮年であったので、その子一万は五才、箱玉は三才の幼少であった。

二、小田原地方は曾我兄弟の成人地

東海道本線の国府津駅から支線の御殿場線に乗り換えて行くとき直ぐ下曾我駅に到着する。駅に下車して周辺を眺めると、西方一帯に酒匂川の貫流する足柄平原という美米十萬石を産する沃野拡がって、その彼方に箱根の連山

と富士の霊峰とが相重って高低を競うのが見え、東方には余陵丘綾という高さ三百米程の台地が帯のように南北に連っている。その台地の麓に曾我の諸集落があって、五万株に及ぶという「曾我の梅林」の名所と曾我兄弟の遺跡の集中地として有名で、昔の曾我郷又は曾我の里と呼ばれたところである。曾我郷は曾我谷津・曾我原・曾我別所・曾我岸・上曾我の五村の合郷で(今は小田原市)平安末から鎌倉期にかけて曾我氏がここを領し將軍頼朝の頃曾我太郎祐信が住した。安元二年十月河津三郎祐泰が工藤祐経のために殺害されたので、未亡人の万劫御前が一万、箱玉の二児を抱いて曾我祐信のもとに再嫁したので、二児は元服の後兄を十郎祐成、弟は五郎時致と名乗った。兄弟は五才、三才の幼時より仇討を遂げて自らも生命を失った。二十二才、二十才の時まで、十八年間の育成の地である。

○城前寺と曾我兄弟の墓

下曾我駅から東へ五百米で達する。もと曾我氏の菩提寺であって、祐信が居城の前方に開基建立したので城前寺と名付けたと言われ、浄土宗で箱根山祐信院と号し、曾我兄弟とその父母に最も由緒の深い寺院として有名で、曾我太郎祐信(祐信院殿長運徹真大居士)その夫人万劫御前(崇清院淨岩高恩大姉)十道祐成(高山崇院殿降岩良雪大禅定門)五郎時致(鷹嶽院殿士山良富大居士)十郎の愛人虎御前(陽春院淨岩慈心大姉)河津三郎祐泰(支降院殿支剣哲霜大居士)兄弟の姉二宮太郎朝忠夫人(相心院安室二宮大姉)の曾我兄弟関係五人の位牌を安置している。

寺後に墳丘を設け、その上に曾我兄弟及び父祐信、母万劫御前の五輪塔の四基の墓がある。伝説によると永祿二年四月に曾我氏が小田原城主の北条氏敵対してこの地に兵火が起り、そのとき旧墓石が破壊されて失われたというので、今の墳丘墓石は俳優協會曾我兄弟墓復興委員会が昭和五年八月に復興建設したのであって、墓前にその由来を書いた文学博士坪内逍遙筆になる曾我遺蹟碑が建っている。

なお同寺の境内には、兄弟と父母の墓所の他に
鬼王兄弟の墓

鬼王兄弟とは曾我兄弟の従者であった鬼王丸と丹三郎
のことで主人曾我兄弟に極めて忠勤をばげんだので知
られているが、この墓石も昭和五年の墓地復興事業の
一つとして建てられたものである。

石
十郎祐成が、大磯の虎御前と屢々この石に腰をおろし
て、逢瀬を忍んだと伝えている。

石
五郎時致が病後に力を試すために踏んだときに付いた
足跡だというのが残っている。

見送り稲荷社

兄弟が仇討に出発するとき、この稲荷の霊が見送りに
出たというのでこの名がある。

○城前寺の曾我兄弟、虎御前木像

曾我兄弟の木像は数カ所に現存するが、城前寺のものは
最も有名で、昔は江戸歌舞伎の新年初興行に曾我物を出
すことが恒例であったので、しばしば、この木像を借り
受けて劇場に祀り祭典を行なった後に劇のふたあけをし
た程であった。

三像とも座像であるが兄弟のもの高さ八寸五分、虎御前
のものは八寸三分ある。面貌は写実的で、十郎は温和で
、虎は美女であるが、五郎のは魁偉憤怒の相であるのは
面白い。城前寺には、この外に、曾我兄弟関係遺品とし
て左記のものその他を蔵する。真偽の疑わしいものもあ
るが、その論を別として一括して紹介しておく。

不動明王像 一軀

兄弟の守本尊という。
不動尊と前立二童子のある木像で、弘法大師作と伝え
る。

昇竜降竜の旗 二流

兄弟が富士の巻狩の際に旗旗として使用したという。
茶色のぬめ絹地に竜を縫出しにしたもので、一流は昇
竜、一流は降竜、何れも長さ四尺三寸五分、幅一尺八

寸、可成損傷している。

虎御前の書翰 一通

大磯の虎御前が、仇討に出立する恋人の十郎に宛てた
ものであるという。文は「又申上候、御暇乞ながら狩
衣又此一いる送行参候、めでたく歸りに承たまり申す
可く候、五月十八日、十郎殿参、虎」とある。

一万の不動明王願文 一通

秦野市にある柳川の不動明王に一万(十郎)が奉納し
たと伝えるもので、早く成人して仇討を成就したいと
祈願している文である。

曾我五郎赦免状

三浦義澄、和田義盛の名を以て善父祐信に五郎の助命
を伝えたものと言われており、全文は
「急事、曾我五郎時致、依將軍憐愍、助命被成候、謹
而是可請給候、五月廿九日、和田・三浦、太郎祐信ど
の」とあって、これと同一のものが大磯の延命寺、箱
根神社などにあり、また別形式のものが箱根の正限寺
、静岡県駿東郡の曾我八幡宮とにあるが、何れもも
の出所が明かでない。

○曾我祐信夫妻の木像

城前寺後方の曾我谷津宮ノ台にある神保家の庭中の阿弥
陀堂の中に安置されている。この阿弥陀堂は、曾我氏の
子孫である神保家の中興の祖甚九郎祐吉が天正年間(即
内に建立して阿弥陀如来を安置して遠祖祐信夫妻の冥福
を祈ったもの)と言ふ。夫妻の木像は祐信のもの高さ一尺
、妻の万劫御前のもの八寸五分あって何れも座像であ
る。家伝によると、甚九郎祐吉が阿弥陀堂を建立した時
に、自ら彫刻したものと云うが、作品は相当優秀で本職
の者の製作と考えられるので、甚九郎祐吉が専門家に依
頼して刻せしめたものと思われる。城前寺の曾我兄弟及
び虎御前の木像と姿態、刀法など同形式である点から
する(但し、城前寺の十郎・五郎の二像は恐らく原像
を亡くして後に補作したものと思われる。刀法も技劣る)
二像を入れてある厨子は文政二年、曾我氏の子孫である
旗本の曾我兵庫、曾我伊予守助順、曾我豊後守助弼、曾
我帯刀などの諸家が再興したものであることが記してあ
る。

○崇泉寺遺址

曾我原の北方台地にあって、富士裾野の仇討の後に善父
曾我祐信が、兄弟の追福のために建立して祐信山崇泉寺
と号した。その後永祿二年の兵火にあって灰燼に帰して
廢寺となつたという。曾我物語の中にある記事に、兄弟

の没後にその菩提のために母万劫御前が大御堂という一
寺を建立して自らもここに籠って、我が愛児の冥福を祈
つたとあるのは、この崇泉寺を指すのであるうという。
古い五輪塔の類石が多数掘り出されているので曾我氏代
々の埋葬地であり、兄弟の遺体もここに葬ったのではな
いかと思う。

○曾我祐信室籠印塔

曾我山の六本松に登る道路の中腹にて曾我谷津の神保家
の所有地内に存し、俗に「お塔さん」と呼んでいて、里
人は祐信の墓と伝えていて、無名であるので、造塔・
意図・年代・造立者など一切が不明であるが、作は鎌倉
時代のものに違いないので石造古美術保存の意味で、昭
和三十六年小田原市重要文化財に指定した。

○六本松峠と相生松

曾我部落から曾我山の峠を越えて上中村・下中村方面に
通ずる古道を六本松越えと言つて、昔は峠に六本の巨松
があったので、この名が起きたが、この山越は大山道で
昔は中村通とも呼んだ。今は古松一株のみ残つて、相生
松と称する。曾我十郎はこの峠を越えて大磯の虎御前の
もとに往復したと伝えており、また相生松は十郎と虎御
前とが逢瀬を楽したところ、或はまた仇討に出発の際
にこの山上にて二人が袂別したところ、或は曾我物語にも見え
ているところなのである。六本松峠の風景絶佳のところ
はとぎす鳴き鳴き飛ぶそがわし(芭蕉)

人も知る曾我中村や青嵐(白雉)

○曾我氏後裔の旧家神保氏と中村氏
曾我兄弟には子供が無かつたので子孫は絶えたが、善父
曾我太郎祐信の先妻の子に祐綱があり、その子孫が多数
の曾我氏に分れて全国に分布した。その中で故郷の曾
の里に定住して連絡とつて現在まで続いている有名な家
柄が二軒あって、曾我谷津に在り神保家と曾我原の中村
家とである。神保家は曾我氏の直系で祐綱の嫡嗣を受け
て曾我城に廻っていたが、祐綱十二世信正のとき、永祿
二年小田原城主北条氏と反目して戦い敗れ、信正討死し
て城も陥入つたので、その子甚九郎祐吉以来武家を受け
て帰農して神保氏を称して今日に至つた。当主神保正平
氏は曾我太郎祐信より実に二十九代目に當つて、一
方中村家は、室町時代足利氏に仕えて一旦故郷を出て京
都に移つたが、祐綱十二代五平太祐定のとき再び故郷に
帰農し、姓を中村と改めて今日に至つた。当主中村祐忠
氏は曾我太郎祐信より二十八代目である。

両家とも立派な系図書を有しているが、特に神保家の
庭内にある阿弥陀堂に安置されている祐信と万劫御前の
夫妻の木像は優秀な作品で貴重な文化財である。

一絃琴考

宮城野 今 田 無 極

一絃琴の歴史は古く、中国では伏羲氏が琴を創作したといわれて十遺記に殷の樂人師延が初めて三皇五帝のために一絃琴を弾じたともいわれている。例仙伝に太真王の夫人玉子が一絃琴を弾じて諸國を周遊したとも伝えられる。青蓮絃琴雅音記に、孫登、白鹿蘇門の二山に居し一絃琴を弾ずとあり、消搖墟に、孫登字は公和郡北山の土窟中に住し夏は則ち草を編んで裳を裳と為し冬は即ち髪を披て自ら覆い善く長嘯す、好んで易を讀み一絃を鼓す。性喜怒なし俗康之に従うて遊ぶこと三年その囀る所を問うも終に答えず、又康琴を學ばんことを講うも登之を教えずして曰く子才多く論纂し難い哉。日本に於ても古代から一絃琴はあり、多く神事に用いられたようである。古事記神話の大神主神が須世理鬘壳をつれ歸る時、持っていた天沼琴や息長帯日壳が神命を開くために弾かれた琴もまた上代に神を招くために用いた神依板も琴の原型であって一絃琴ではなかったかと思はれる。

我が国で現在行はれている一絃琴の起源については、次のような伝説がある。平安朝の頃伊勢物語で有名な歌人在原業平の兄行平が事に触れて須磨に謫居したことは、源氏物語の源氏の君のモデルともなったほどで、わが国の文学史でもよく知られた出来事である。

その行平が、わび住みのつれづれに濱に打ち寄せた廂板を拾い、それに冠の緒を張

り、崖辺に生えていた声の菅を切つて指にはめ、歌に合わせて弾いたのが和式一絃琴のはじめといわれ、一名須磨琴ともいわれている。

日本後記八巻に、恒武天皇延歴十八年七月の条に、小船に乗つて三河に漂着した一人あり、布を以て背を覆い、特鼻あり袴を着せず左肩に紺布を著け形袈裟の如し、年二十可身長五尺五寸耳の長さ三寸余言語通せず、何國人たるを知らず、唐人之を見て異人なりと、常に一絃琴を弾す、歌声哀楚。このような記述だけではこの南方人が一絃琴を初めて日本に伝えたという証拠にはならない。それまでに一絃琴というものは既にあったと考えるのが至当であろう。

ただ現在行はれている一絃琴の形態が何時どのようにして作られたかが問題であるが、それは正確にはわからない。中根香亭の説によると、寛文の始めの頃中国から伝わったものではないかといわれている。(大百科辞典)中国の七絃琴に似ているところから見ると大陸からの影響によって現在の形態や構造が生れたことは間違いないであろう。

伴高蹊(文化三年七十四才歿)の開田次筆には河内國駒ヶ谷の金剛輪寺の僧が一絃の須磨琴といふものを始めたとして記してある。この僧というのは所謂一絃琴中興の祖といわれる寛隆阿ジャ梨で今から百五十余年前の人である。

寛隆は高僧の聞え高く麦飯を食ひ、ひたすら仏道に励んでいたので村人から山坊麦飯と呼ばれ自らも麦飯僧人と号し学問に秀で志も高く、蒲生君平、加藤千藤、伴高蹊なども交際があった。

寛隆は赤井某について一絃琴の弾法を學んだといわれているが、多くの人々の希望に依つて一絃琴を再興したということが門人の中川蘭窓の著板琴知要に出ている。

門人には矢作源泰亭、中川蘭窓、中山備前守、久保田但馬、石黒俊業、木村晴孝、仲清左エ門、上条作左エ門、他多数の人々があった。

中山備前守は水戸の国老で久保田但馬は奈良、中川蘭窓は浪花の人であらうけれども寛隆門下の名人であったといわれている。紀伊の国の木村晴孝の弟子に杉原雨といふ人があり、その門人に伊予の真鍋豊平があつて、この豊平の技が非常に長じていたので、幕末に正親町中納言から一絃琴取締役を命ぜられ一絃琴の家元師範役になつた。なお、この他寛隆の門流を汲んだ人々に、内藤豊後守正綱、百瀬俊校、僧信海、佐々木弘綱、松本齋堂等があつた。

真鍋豊平は晩年東京に出て一絃琴をひろめ、その後門人富田豊春が家元を継いでいる。

私の師である山城一水刀自(昭和廿九年無形文化財指定)の先考である徳弘太無林翁は、嘉永二年十二月土佐の高知に生る。司法官であつたが明治二十五年退職、京極東山に隠棲、神仙の術を修めようとして蕎麦粉と胡麻味噌だけを食し極寒にも単衣一枚に既足で街を歩いたといふ、常に一絃琴を携えて白河山白幽子巖居に入り、晋の孫登が白鹿山の高韻を追い煉丹無桐獨り性を樂しむ、茲に於て琴興大いに加はると、後ち居を京都市立売室町東入るに移し一絃琴、煎茶、俳諧などを教授した。一絃琴は真鍋豊平から學んだといふことであるが、これ

が普及と琴制(樂器)を正すことに努力し完全なる琴譜を作らうとして同好の士を訪ね逐に清虚洞一絃琴譜を完成した。この程発見された清虚洞琴操備忘に、余嘗て西都に住せし時浪華に遊び北区曾根崎町一八九四番の永藤滴翠老人を訪ね清溪の余琴を聴かんことを請う、老人余がために一二曲を弄す、余初めて琴の高麗を知る。とあるを見ても如何に一絃琴に對して熱心であつたかが伺い知ることが出来る。

浪華の永藤滴翠老のことに就ては一水先生物故後に発見されたもので知るよしもないが、如何なる仁であつたかを知りたいものである。

太無林大人は明治三十八年上京、東京芝三田北寺町大松寺に居住、専ら一絃琴を教へ風流を樂しんで生活していたといふ。これは一例に過ぎないが、真鍋豊平の後を継いだ富田豊春と共に豊平の追悼一絃琴会を営み遺品遺墨の展覧、演奏献茶などを行なつたといふ。

明治以後大家にして之を操する者に參議斎藤利行、大藤柳渡辺國武があげられて居り、近世名家にしては國守水戸烈公があり、志士佐久間象山、平野一郎などで殆んど男性であつたようであるが、現在では土佐の秋沢、京都の平野、倉知、東京の故山城一水の諸氏は何れも女性でその門人も大方は女子である。私が一絃琴を弾くに至つたことに就ては先づ琴を入手したいいきさつから述べなければならぬ。

一絃琴という楽器は見本があれば、少し器用で演奏し得るものなら製作出来るものであるが、安政年間には美濃屋宗助の作つたものがよしとされ、近世では高知の佐竹卯之助が

あげられている。私も一基の自作琴があるが名琴とは勿論いえないであろう。私は放送局を二十三年三月に退職、老後を岡山明星寮の白雲居で余生を送っているが元来風流韻事を好み、故に生活力には極めて乏しいのである。

昭和七八年の頃であったかと思はれるが、私が風流生活に入ったばかりの時、田能村竹田の彈琴淡水彩幅を鑑賞したことがある。その画中人が忘れられず、吾れ若し琴を得ることがあれば、とは私の念願であった。

昭和廿五年の頃であったか、当時小田原の十字町に在任の蓑田天峰老を訪ね、清談中一老女一基の琴を携へて来訪、わが家にこんなものが遺っているが、今や無用のものである。誰か欲しい人はいないだろうかということである。一見実に幽雅なもので、之が永い間夢にも忘れたことのない一絃琴であつてみれば、將に天与の賜であろう。勿論否応のあるべき筈はなく、天峰老の斡旋にて譲り受け、爾来一絃を弾く友を探すこと数年、遇々廿九年四月のアサヒグラフ誌に、珍楽器として一絃琴が発表されているのを、京都の知人から知らせを受け、欣喜雀躍早速雑誌社に山城一水刀自の住所を問い合わせ、書簡を送つて教えを請ひ、初めて手ほどきを受けたのがその年の秋十月であった。

因みにこの琴が、元竹添井々先生の妹君の愛器であつたということを、後日に於て縁籍に当る元文理大教授綿貫哲雄博士夫人(加納治五郎治五郎氏次女)から聞き一層の感懐を覚えている。其後太無林遺愛器等に自作琴を加え、現在五基の琴を蔵している。爾来十年に及ばんとしているが、その間

京都、兵庫の須磨寺等の抱琴行にも参加したこともあるが、一絃琴に対する私の理想は矢張り、王維の詩の如く
独坐幽篁裏 彈絃琴復長嘯 深林人不知 明月來相照……山中獨り佳趣を樂しむことにあるようである。

附記

先般私の愛蔵する一琴琴の取材にNHKから内山兩海氏並に写真班同伴にて来訪。放送文化六月号「一絃琴幻像」として内山氏が書き写真が出ていたので、その一文を抜萃して見たい。

四月中旬の雨の日、箱根宮城野に住む、今田無極氏を訪ねた。無極氏夫妻は老後を宮城野の白雲居に籠り、庭の落葉か掃きながら、のどかな茶人生活に明け暮れている。うらやましい限りだ。この無極氏が一絃琴の古琴を愛蔵していて、気が向けばそれを弾き夢うつつのような唄をきかせてくれる。それからききたくなり、久方振りに宮城野に足を向けたのだが、朝からの雨は幸いに小やみもなく降りつづいた。一絃琴をきくには蕭々たる雨の日に限ると思つて、白雲居の古びた門を入ると、ほどよい竹林があり、折からの雨に閑寂な音をたてていた。紙張りの戸を開き田舎家の土間のようなどころに入り来意を告げると中国服の無極氏がここにこしなまがら出て来た。

無極氏の所蔵する三基の一絃琴は何れも古いものだがその中の最も古い一基に魅せられた。古語に、有色非真画、無絃是古琴という私の好きな句がある。この語の無琴の絃とはおそらく一絃琴の絃が無くなってしまった古いものをさしているのであろう。そんな古い琴に、ちゃんと一絃の通つたも

のを無極氏は持っているのだ。無極氏はその古い一絃琴を弾いてくれた。白髪の夫人が琴につれて唄い出すのだが無極氏もかすかに唄っているのだった。琴ヒツ相和するとは……そして雨にも音色が和しているのは、私はこれだなと思うと同時に、なぜか「唐代」の匂いを感じとったのであつた。

一絃琴の曲は、はじめがなく、終わらない唄といえどもさしたる節も感ぜられない。茫洋としていて、こちらの方から耳をよせてきかなければならぬ楽器だ。一絃琴は人にきかせるものではなく、弾く人自らが樂しむものである。その美しい乏しきは鳥にたとえられ、佐渡などに住み残っているトキにひとしい。(書画家)

足柄平野農耕と古代千代台周辺について

高田史談会 内 田 武 雄

足柄の箱根の山にあわまきて
実とはなれるをえなくとあやし
日本の歴史が始まる大昔から、私達の祖先はこの足柄の地に、文化を築き上げたのでしよう。

足柄のをてもこのもにさすわなのかなるまじづみころ我ひもとく
このように万葉集にたくさん歌が書かれていますのみても、大昔からこの足柄がいかに栄えていたことが皆様にもお解りになることでしょう。私たちの住んでいる郷土は朝起きれば、西に箱根の山々が連なり清らかに雄大な富士がそびえ、南には、はてしなくつづく大平洋をのぞみ時には大

島の三原山の煙がのどかに立ちのぼるのが見えます。

東にひくくつらなる緑の曾我山気候は一年中寒からず暑からず。大昔の足柄平野は花が咲いて鳥がうたう楽園のような地であつて、南方に流れる酒匂の清流に人々は我れも我れも、この足柄の地を求めて集つて来たことでしょう。足柄地方にも永い間の原始時代がつづき、弓矢、石やり、石おのを持って、あぐれ動物をおいまわした時代もすきて、お米を作る農業が北九州につたわつたのは紀元前一、二世紀ごろのことといひますから、今からさつと二千年あまり、むかしのことです。それからわすか一世紀か二世紀のあいだに、この新しい文化は西から東へどんどんひろまって来ました。お米を作るには、平らな土地とその田に引く水が必要です。けものや魚貝をたべていたころは、ひとつ土地に長くいては食物が足りなくなるので時々引越してせねばなりませんでしたが、農業がさかんになってからは、ひとつ土地に長く落ちていて住むようになって、村落をつくるようになりました。昭和卅二年小田原市千代部落で暗渠排水工事の時に地下八〇センチぐらいの所から弥生時代のお米の倉の入口の柱やかまち、入口の開戸やお倉にのぼる一木作りの梯などが出土しています。当時のお米の倉は床がとて高く入口には梯をかけ、ねづみが入しを取付けて屋根は草ぶきで入口の戸は開きになっていて開戸をあけても、もみがこぼれないように入口のかまちはとくに高くなっています。

なるべく日影に立てたらしく其附近には今でもたんぼの地下には、八〇センチや一米ぐらいの太い木が立ったままあちらにもこちら

にも見られます。これを見ても当時大勢のお百姓さんが、えんこらえんこらと取種物をお倉の中へはこんでいるようすが目に見えるようです。お百姓の家は立式式で地面に穴をほって柱を立て上に草で屋根をふいて家の中にはいりがあり、土器もたくさん出て来ました。土器には食物をたくかめなどが色々ありました。ごはんをたくかめには、なべずみがたくさんつもってあります。又あるかめのそこに、当時のお米のつぶの附いているあとがありましたので、これを専門家によく調べてもらいましたところ、このかめのそこに附いていたお米は今から、ざっと二千年前から、千三百年前頃まで此の地方でさかんに作られたお米で名前は、「オリザグラヌナタ」と言う種類だそうです。この地方の沼地によくできていて、肥料や農薬もないこの時代でもさうとう収穫があったらうとのお話でした。又家のつばには当時たぐさんの木の葉を食料としてたくわえておいたのでしょう。クルミ、モモ、クリ、ウメ、ハスの実其他色々の食物が出ています。クルミなどは焼いてたべたらしく中には、こげているものもありました。木器類では、鉄、田舟、田下駄、木皿、剣、又奈良時代の物ですが、こま下駄が三足ほど出ています。当時金属器が伝わったとはいっても、一般の人たちが使う木器を作るに使ったぐらいいはなかつたでしようか。ここから出ている鉄も木製であるのを見てもおわかりのことでしょう。ただ一個鉄おのがでていますが、これは奈良時代のものようです。それから沢山の石型がつみあげてありました。この所から出て来たお茶わんや、かめなどに、この石

型をあてるとびびりとなじみます。雨の日など、うすくらしい家の中で子供がこねた土を夫婦そろってこの石型で土器作りをやったのでしよう。「私の家でもこの石型を使ってっばなお茶わんを作りました」この石型はあちらの家も跡、こちらの家の跡からもたくさん出ています。細文時代の土器とちがって、こでは、うすいで丈夫な土器で模様もあっさりとして規則正しく上品な弥生式土器から、土師器や須恵器などが出ました。附近には土器を焼くカマ跡などもあつたカマ跡からはいくつかの土器片のかたまつたものや、ねん料につかつた木炭や石炭などが出ているのを見てもカマも進歩して高い熱が出せるようになっていたことがわかる。

又千代台を取りまく北側の国府海(こうみ)今の下曾我脳院の敷地からは、テレビをご覧になった皆様にはおわかりでしょうが、平安時代の古井戸や当時の建物跡からはお百姓さんが使った、しかも箱根竹で作った、箕が出ています。食物では、お米、アワ、ヒエ、モモ、ウメ、クルミ、其他多数の土器片、こん虫などが出ています又動物の骨なども出ているのを見てもまだ原子時代のなごりもあつたのではないでしようか。お米が此の地方につたわって当時しつけ地帯の沼地を利用してお百姓さんが、田下駄をはいて田舟によって収穫をする模様が目に見えるよう、いかに此の地方が早くから開けたかがうかがわれます。



伝馬制度と税金

清水専 吉郎

徳川時代の末期に伝馬という制度が重要されて庶民が苦渋した事がありました。

慶長七年に駅法が制定されたのも寛永十二年に参勤交代制が設けられ、諸大名の交通が多くなり、文化七年には万石以上の諸侯は交通に本陣必用と定められ、道中奉行の支配のもとに東海道、中仙道、奥州街道、日光街道、甲州街道の所謂五街道に江戸日本橋を起点として幕府の集権的な用向をなしたものです。

江戸時代の文化がすみ、人の往来が繁くなり、街道筋のイン盛につれ東海道の小田原宿も箱根の関所と酒匂川を控えて交通の要衝に当り、本陣、脇本陣が四軒つづ、東西に江戸方、京とて上、下の二箇所に関屋敷があり、本陣以外の旅宿旅館屋が軒並に数多くあり、其の間に遊女屋も大きく賑やかに、商家も繁栄したので、之に反比例して前述の伝馬の役をかけるので江戸時代末から明治の初めまで苦難であつた事が申し伝わりました。

俗にお伝馬といつて、小田原宿も町並各戸に次駅まで運送の荷役を負す制度で馬匹或は人足何人かを労力又は出資による義務を各戸に馬何匹とか人足何人とか家の大小に由り経算して負わせた一種の租税制度でした。

宿駅には問屋場が伝馬の世話をし常備の人馬で足りない時は近郷から助郷として人馬を徴発して之に充てました。大名の往来がはげしく荷物の運送も多きため近郷の助

郷も度々に町家のみならず農家まで難渋せる由を明治時代の老人より聴かされました。其の頃この馬匹、人足の負担や代償に耐え兼ねてその所有の土地が持ちきれず、他に移るとか、宅地、家屋に酒何升を附けて譲り他行するものもあつたという事で、町家が疲弊したそうです。

之は筆者の祖先縁者が本陣や脇本陣を営み、曾祖父が町年寄や名主を勤め小田原宿の問屋場や駅遞(郵便局)の始めをいたした関係上、祖母からよく聞かされた事実です。お伝馬の銅製の捺印や、馬四人足の町内各戸の割当の古文書がありました。丁度大東亜戦争当時誠に惜しい事でした。丁度大東亜戦争当時、各個人の労力奉仕で、あの山での材木運びや、壕の土掘りや、寒中エゾ(樺)の皮刺などの勤勞奉仕の美名のもとに不文律の体勞を負わされ、彼の一回限り乍ら資産税を課せられた当時を想い起されます。

移り変りは世の常ですが早川の荘から大森昔代、北条五代徳川幕府、大久保藩と五百年の時代推移を間近に見つ、小田原市も宿場より町の発達、交通の変化、飛脚、人車、馬、車、電車、今は山北廻りでなく鉄道の要駅に当り小田原駅も賑わしく、自動車は頻繁に便利の恩恵に浴し、嘗ての戦の港も今は小田原天守閣が立派に出来て観光の客を楽しませ然かも収益の一翼を担っています。お伝馬当時を想いやり転た今昔の感に堪えませんか。どうかよろこんで納税出来るような世になりました。

曲った棒を直すようにするためには、われわれは棒を反対側の方にまげる。

モンテニニ

小田原三者考

志波 太生

小田原近くなった湘南電車下りの車内で
団体屋の番頭さんが

「昔、小田原はサンジャの町といってまし
てね、さんじゃとは医者、役者、芸者のこ
とですな……」

とお客に説明が続く、
なるほど三者かと、わかったようなわか
らない気持ちで小田原で降り、小耳にはさ
んだ三者をあまり永くない小田原在住の私
は考えてみた。

昔、小田原寺町に桐座という小屋があっ
て、上方の役者が江戸での御目見得には途
中この桐座でテストされる、いわば役者の
登竜門といったような由緒あるものであっ
たことを思い出した。そのことは桐座復興
をいまの歌舞伎、新劇界の一部で提唱され
たとき勿論そういふことになされていたこ
とを知ったのである。

そういえば長谷川一夫の大当り映画「男
の花道」もこの桐座から取材している。長
谷川の歌右衛門が江戸に上る途中御多聞に
もれずこの桐座に乗り込んだトタン持病の
眼疾が癒して失明寸前、ロッパの名医が治
療にあたって快方に向い、桐座の評判も上
々で無事江戸に発ち一躍江戸の人気役者と
なったが、かつての目の恩人の怨を知って
一世一代の御恩返しをするという筋である。
その頃の小田原には芝居に目の高い御連
中、つまりウルサ型が住んでいたものであ
らう、そんなことから役者その他の幕内者

が沢山いたにちがいない。

医者は箱根の湯治を背景に、又、北条以
来関東随一を誇った大都市だっただけに人
口もいまより大分多かった時代もあり、文
化的要素を多分にもつたこの地に必然的に
医者の簇生が考えられる。最近ある友人と
市中をウロツイタ時「医者の看板が馬鹿に
目立つね、医者の数と人口比を調べてみる
よ、面白いデータがでてくるよ」といって
いたが、なる程そういえば医者の多い町で
ある。

これで医者と役者の二者がわれながら合
点したのだが、あとの芸者の一者を考えて
みよう。

いまの小田原の芸者は実に数十人という
淋しさだが、箱根になかった置屋、検番が
小田原から離れて独立したのと、地の人の
箱根利用度が高くなったことがあげられる
であろうが、昔は大したものだったと聞く
さもありなんとなつづける話もある。

伊藤博文が憲法起草をした当地の清浪閣
で白人つまり青い目の外人芸者をヒイキに
していたことがある。この芸者メリーとよ
び、三味線ならぬタンポリンをもって御座
敷にでたという、外人芸者のハシリである
。いまの中央劇場が元の「やよい」といっ
た置屋兼料亭だった頃伊藤公ヒイキのメリ
ーの娘か、孫娘かわからないが、これもメ
リーといつて外人芸者をかかえていたこと
があり、関東大震災のとき、「電気ユラユ
ラ家がユラユラ、メリーこわい」といって
震災後のたぐいもの関係もあって本人の
意志で徒歩で横浜まで帰えったということ
を当時の女将でありいまは煙草屋をしてい
るばあさんから聞いたことがある。その震

災後復興された浅草にそのメリーが又のつ
とめをしたことがあるらしい。いま東京で
は欧州かアメリカか、その国籍はどっちに
してもよいとして芸者のような存在の外国
婦人がいるそうだ。日本もメキメキと強
くなってきたものである。(市・幸一、元新
聞記者)

鉄道記念物(一)

額田喜代春

わが国に鉄道が初めて、開通したのは一
八七二年のことで、明治五年九月二日に
当ります。

世界で最初の英国で鉄道が誕生してから
四七年後になり、この日わが国の鉄道は、
新橋と横浜との間(二九・一軒)に敷かれ、
この工事を主に指図したのは、英人技師エ
ドモンド・モレルという人で、当時新橋と
横浜の両駅に、明治天皇のお出ましを願っ
て、盛んな開業式を行いました。この日
は現在の太陽暦でいえば、一〇月一四日に
当りますので、毎年この日を鉄道記念日と
して祝い、鉄道につくした人々の表彰や鉄
道についての催物をしています。

鉄道創業の頃の日本の人口は、三四八〇
万人で、それから九一年後の現在の人口は
約一億で、これはまさに二〇七倍にふえた
わけで、また全国津々浦々にいたるまで、
二万五〇〇キロ余にわたって、はりめぐら
された国鉄利用者の増え方は、それどころ
ではありません。

億トン)の貨物を輸送している。

明治五年開業当時一人当りの鉄道利用回数
は、一年間にわずかに〇、〇一四回にすぎな
かったが、現在では五二回、実三七〇〇倍に
、貨物も明治五年には四六四トンにすぎな
かったが、現在では一九五〇〇万トンに実四
〇万倍に増えているのである。そして収入も
年間旅客貨物あわせて、四〇〇〇億円をあげ
ている。しかもわが国経済の発展に伴って、
ますます増加の傾向にあるのであります。

そこで国鉄では昭和三十一年一〇月一四日の
第八六回鉄道記念日に、鉄道発展の歴史の上
で記念すべき記念物や功労者を選び、毎年こ
の日を期して追加発表し、現在では二一点の
多数にのぼっている。これから回を重ね
て掲載いたします。

当時は馬が駕にたよるしかなかった頃であ
る。黒い土を焚いて走らせる岡蒸汽に人民
をのせるなんてとんでもない。キリタンバ
テレンの魔法だ!!と、大隈重信は当時民部兼
大蔵大輔で、もっとも鉄道の建設に熱心であ
り、伊藤博文と二人で実現に漕ぎつけたので
あるが、鉄道を作るくらいなら軍費にまわせ
という陸海軍(西郷隆盛等)の大反対を先鋒
に、東海道の宿屋、人足なども蜂の巣をつつ
いたようなさざわぎを起した。外国から借りた
金で作るとは帝國奴だとの文句が、当事者に
はいちばんこたえた。品川は陸軍用地だから
測量も建設もさせぬと頭張られて、遂に海
中に敷くことになった。明治時代の方々は思
い当るでしょう海岸線を走っていたことを。
若人の中には、大隈や井上勝を刺し殺すと
ねらう者まででた。そんなさざまの反対を
押し切って、鉄道建設工事は雄高く開始さ
れた。工事の総監督を前述の英人エドモンド

・モレル技師そのほか石工、鍛冶屋にいたるまで外人ばかりで、日本人役人、人足は外人の指揮下に働いた。外人が長靴で海中に入り測量するのには、日本人は陣羽織に袴のももだちをとり、その上に腰にさした大小が邪魔になって、磁石の針まで狂わせるという有様。そこで鉄道員に限り無腰でよいことになった。このモレルは非常にゼントルマンで、質実な鉄道を短期間に、つくってくれた大恩人で、明治三年三月に来日したが、工事なかばで病氣となり、同四年九月二四日二八歳の若さで、最初の開通も見ずに死去、いまは横浜の外人墓地に夫人と共に眠っているが、国鉄では昨三十七年一〇月の鉄道記念日に、モレル氏の墓を鉄道記念物に指定して、その功績を永久にたたえることになった。

鉄道〇哩標識

明治二年一月、鉄道創設の願議が決して先ず、東西両京を結ぶ幹線を敷設することとなり、手はじめに東京―横浜間の工事を起すことが決り、翌三年三月二五日、民部省用地として、東京汐留町、旧蘆野、仙台、余津の三藩邸の地を東京における停車場と定め、前に来任した備英人建築長エドモンド・モレル、土木大属小林易知、準士等出仕小野支五郎とともに、汐留町より線路の測量に着手したのである。これが吾が国鉄企業の創始である。

スター武者満歌が登場したのである。武者満歌は友太郎といひ、嘉永元年本所に生れた江戸っ子である。海軍にいて数学に秀でていたところから、明治三年民部省鉄道局に採用され、汐留から六郷にかけての測量に従事したのである。

ひとり武者満歌に限らず、当時測量に従った日本人はすべて毛織のだんぶくろに小倉の脚絆で、雪駄ないしはわらじばき、頭にピストル様のまげをのせ、それでも表が黒塗りの陣笠をいだいていた。けれども大小を差すのは仕事の邪魔になるというので、願いでてささないでよいことになったところがこれが明治の魔刀の魁けとなったというから面白いですね。この花武士武者満歌は九〇歳の一生を終るまで、記憶もはっきりして、当時の模様を語り伝えた史実上の重要人物であり、当時の記録はこの人に負うところが、多かつたと物の本に書かれている。

だが残念ながらこの〇哩原標を誰が打ちこんだのか判っきりしていないことは残念である。

〇哩の杭が打ちこまれてから六四年、鉄道は驚異の躍進ぶりを示し、全国の間々までのびていった。昭和十一年一月汐留駅構内大改築の際この木柱が発見された。これは正に本邦鉄道の起点であり、後世に残すべき重要な史跡なので、何とか永久に残したいというので、関係者が協議して、現在の碑が建てられ双頭軌条が残されたのである。

この双頭軌条というのは文字通り軌条の頭部の底部とが同形で、特別の鉄くつ内にタイをもって締着し、枕木上に据付けられた。

イギリスの鉄道で名高い牛頭軌条の原始形である。なお当時は枕木に檜材を使ったとある。

なおこの〇哩標識下の台石には
軌条 双頭式六〇ポンド
附属品 繼目板ポールト、チエーア
製造年代 西歴一八七〇年
開通当時コノ起点ニ敷設セラレタル部ニシテ本邦軌条中最古ノモノナリ
の文字が刻まれ、碑には

明治五年九月二日日本邦の鉄道初テ東京横濱間ニ開通スルヤ当時本駅ヲソノ起点トシテ新橋駅ト称シ哩原標ヲ此ニ建植ス是レ本邦鉄道ノ地ナリ其ノ開通祝典ノ挙行ニ方アリハ長モ明治天皇ノ親臨ヲ辱フス爾來星霜ヲ閱スルコト六〇有五國運ノ伸展ニ伴ヒ其ノ線路延長今ヤ三万軒ニ垂トス大正三年汐留駅ト改称シテ貨物専用駅トナシ今日ニ至ル茲ニ本駅ヲ改築スルニ当リ碑ヲ建テ以テ永ク旧跡ヲ護ラサラムトス

昭和十一年一月 鉄道省
の銅板がはめこまれ、汐留駅構内には時の鉄相内田信也の大書した「本邦鉄道起源地」の大文字がある。

世界に誇り得る国鉄は今年一〇月には九回の記念日を迎え、来年秋には世界最初の二〇キロをマークする東海道新幹線が広軌によって、スタートしようとして工事が進められているのであるが、想えばこの〇哩こそ吾が国、鉄道永遠のスタートラインである。(つづく)

山の随筆より

朝、山が明るく晴れていると、私の心は明るく晴れやかだった。山が曇っていると、私の心は暗かった。

そうして、私は山を見て少年時代を育った。私の見た山は、箱根駒ヶ岳、双子山、神山である。家の屋根に上ると眼界は遠く拓けて足柄連山、丹沢山塊が一望のうちにあった。私は春に、夏に、山にのぼった。手製の捕虫網を持って――胴ランを下げて――絵の具箱

をかついて――町から乗りものにも乗らずに歩いていった。蜜柑の熟れる丘の上を駆け廻った。

私の少年時代は、そうして山と海の中にあつた。私は山のある故郷を離れて都会に生活することになった。それから三十年、烈しい都会の生活の渦の中で、懸命に詩を書いた。その間、私は機会を作って旅をした。山に登った。苦しい生活の中で、それがせめてもの楽しみであった。

(中略)

私が生きてきた今日までに、どんなに世相が変ったか。私は自分の生きてきた日々を、せめてこれらの文章で、あらためてふりかへるはかない。

「お父さんの若かった頃は――」

私たちはそういうまえおきをきいて、私の父の若い頃のこと、誰かの父の若い頃のことをきいた。そんな話の中には思いもよらないものがあつた。私のこの文章の中にもそれがある。日毎、年毎にすべては移り変つて、新しい姿が、そこにある。

ただ、そのほげしい移動の中でも、私は山を愛する心と、詩を愛する心を変われないで

た。それでいいと思っている。私の一生は、詩の中にあり、少年時代に見た山の姿の、いまも変らぬ光と影の中にある。(小田原出身の詩人井上康文氏の旧著「山の随筆」より)

文苑

短歌

杉山康輔

押印の素直にきまるその角度
下積みとなり二十年の出勤簿
踏まれつつ根太く生青し麦の茎
踏むわれ妻が歩み来しみち
いざ去るとなればわが寄る机をも
無せて辞令を買ひ行きたり
おのづから定まる席の片隅に
時得し人のむかしを言はず
明らかにあざけりに代ふる賞め辞
いらふ術なく苦しく黙す

浅井久美子

吾子の時きしコスモスの芽も青く伸び
ひしめき合いて日射し受け居り
回転するコンクリートミキサーの片方にて
職人ら手際よくブロックを積みゆく
ネオンはなやまし温泉の町の高台に
仏舎利の塔黒くたたずむ
吾子と童謡を唄いつつ遊び居りぬ
城趾公園に心のみて

俳句

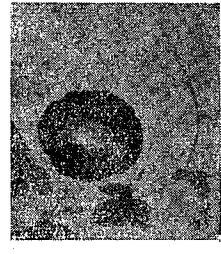
広沢十五夜

夏あさみ紅ひそめて葉の垂るる
朝あけの露もすがしき花あさみ
手に触るる草ひややかに梅雨びめり
二の腕の若き産毛や青嵐

漢詩

始聞蟬声

若杉一所
緑樹重陰静草堂
雨余風爽送微涼
臥牀乍被攪閒夢
聞得新蟬噪夕陽



上垣候鳥画伯

小田原における
日本画家(一)
小田原史談会員

安田靉彦画伯に師事し、現に美術院院友として重きをなし、院展の入選二十回奨励賞を受け、その他各展覧会に出品して受賞不尠、花鳥を得意とす。市内十字四丁目(お花畑)に住し日日画筆に親しんでおられる。本年五十一歳、性格淡にして寡欲、温厚篤実の紳士である。(カットは画伯筆)

初夏幽居

若杉一所

新晴首夏午風微
時見窓前燕子飛
浮世紛々渾不レ管
緑陰深処倚書幃

槿花

蓑田天峰

雨晴紅白滿庭新
曉露凝粧似媚人
休道撞花榮一日
奈使駭客幾傷神

歌集「倭をぐな」より

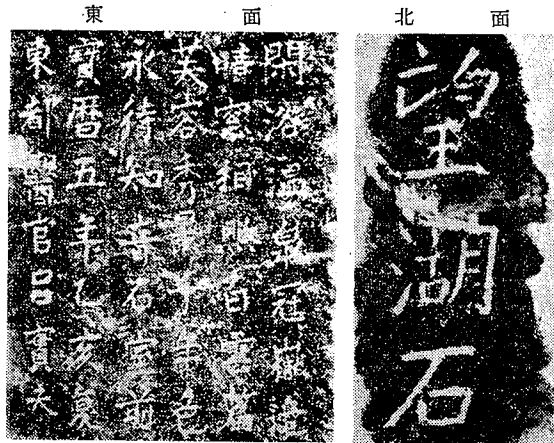
昭和二十八年八月箱根仙石原の叢隱居を降つて不帰の客となった国学者折口信夫博士の最後の歌集より拾つてみた。

みつまたの花は咲きしか静かなる夕べに出でて
処女らは見よ
みつまたの花を見に出よみつまたのさびしき
花は山も悲しき
我ひとり寝つつ思へり隣国の駿河の山のさや
ぎあるべし
山の道ほどの草の照りかへし懐にして我は
寝ほしき
かくひとり老いかがまりて人のみな憎む日は
やく到りけるかも
戦ひの十年の後に頼もしき恋する人の上を聞
かせよ
よき恋をせよと言ひしが処女子のなげくを見
れば悲しからし
人間を深く愛する神ありてもしもの言はばわ
れの如けむ
雪しろのはるかに来たる川上を見つつおもへ
り斎藤茂吉
(この友人斎藤茂吉を偲んだ一首が絶筆と
なっている)
なお斎藤茂吉の歌碑は強羅にある。
おのづから叙しくもあるかゆうぐれて雲は大
きく谿にしづみぬ

茂吉

望湖詩碑

婁子温泉に近き神山につづく林中に、徳川中期における有名な医官野呂元丈の建立せる詩碑がある。元丈は永く幕府の薬草御用を勤め、西洋博物学の開祖として知られ、また採薬の足跡あまぬく印せられ高山植物採集の元祖ともいわれている。この碑は渡支の請願



をなしその許可を待つ間、薬草採集をかねて保護中の作で、この彫刻も自作と伝えられている(拓本は緑四丁目居住書家浜田如月氏の撮りしもの)

望湖石
 関谷温泉冠岳辺。晴窓相照白雲篇。芙蓉秀景千年色。永待知音石室前。
 宝曆五年乙亥夏東都医官呂民夫
 (碑の高さ約五十七センチ幅三十二センチ)

会の発展策についての希望

養田 長平

史談会の現状について、誰もこれとよいと満足している人はあるまいと思う。それは、史談会そのものの性質が極めて重大性を帯び縦に横に堀下げるに従って無限に研究すべき事項があるからである。

今日まで、わが史談会が振わなかった原因についてはいろいろある。いままらそれを繰返す必要はない私は自己反省とともに、希望事項として次の各項をあげて、各位のご一考を煩わしいと思う。

一、史談会の認識を深める

史談会のありかたについては認識不足の人が多く、ややもすれば老人の隠居仕事か、閑人の物好きにやっているかに誤解されるが、史談会の性格はそんなものではない。郷土のすぐれた先覚者たちの人物と、事業と、思想等を歴史的背景の中に研究し、これによって内からわきあがる信念を醸成し、実践力を養い、これ

によって新しい時代をくり出すひとつの原動力ともなるべき性質を有し、老人よりも寧ろ青年に必要欠くべからざる要素を含んでいると信ずる。要するに史談会は愛郷心延いては愛国心につながる。老人や閑人がひまつぶしにやっているのではないことを、一般市民に知らせる必要があると思う。

二、中心人物の必要

中心人物のある会は発展し、反対にその人を得ない会は衰えるのが、各国史談会の共通である。その一例として湘南の〇〇〇市に篤学にして熱心な指導者があ

る間はよかったが、昨年その人が死去されて以来、史談会は影を没するにいたった。幸にわが史談会には熱心にその任にあたっておられる副会長ほか役員諸氏があり、そのほか史実家として有名な中野敬次郎氏を新に副会長に迎えることになり一段の光彩を放った感があり、会員一丸となって

働く以上将来の発展は期して見るべきである。

三、郷土誌の編纂

郷土誌の編纂は私の多年の希望である。さきに月刊誌創刊の際にも、私はこれに反対して一年二回か三回にわたって郷土史の編集を為すべきが至当なりとの意見を述べたが、これは聴かれなかった。今日われわれの為したあとを顧みて、果して将来に残すべき何物があるかに想到して寂しさを禁じ得ない。既に隣町の南足柄町、山北町でも相当な幹な史誌を発行している。われわれが奮発すれば出来るのにむづかしいことはない。斯道の権威者中野副会長を中心にして、この際は非実行に移したいものである。

四、史談の範囲を拡大する

小田原の史談は、名実上その記事も小田原に限ると聞かされたことがあったが史談の性格はそんな眼光の狭いものではないと思う。少くとも箱根と小田原は密接な関係があり、切離して考えることはできない、箱

根は史談を説く限り同一に見るべきであり、近隣の市町村もまた然りである。前には足柄県として範囲も広がった筈である。なお広義に解釈すれば、歴史は広く全国につながるを持つ。われわれが歴史上の見聞を深め、知識を求むるためには広く全国の記事を取入れてよいと思う。

五、手当支給のこと

今日まで史談会の事務は郷土文化館の方々を煩わした。今後もしご厄介にならねばならぬ常に感謝しおるもの、これに酬ゆるものはない。本来ならば史談会には有給の事務員を置いて然るべしであるが、経費の都合上それができぬとなれば、その局に当る人々(集金係りの会員を含めて)何程かの手当を支給するの

が至当であると思う。この際広く会員を募集し、現在会員の会費を洩れなく取立てたならば、相当の経費は得られるのではないかと。六、墓墳参拝のこと
 史談会の事業の一部として市内にある平成輔卿や北条氏政、氏照の墓、長興山の春日局の塔等を清掃し、

命日には香華を捧げることにしてはいかかものか、私は去る五月二十二日成輔卿の命日にお詣りしたが、他に一人の参拝者もなく、世人に忘れられたかのようひっそりとしていた。曾ては学校の生徒を引卒参拝せしめ祭事を行ったこともあり往時を追想して墓前に寂しく頷いていると、おりしも老松の梢から露がはらはらと顔や袖に落ちかかったので、後醍醐帝が笠置山を落ち給うたおりの御詠が思い出されて感一しを深かった

事務分掌決る

七月十一日開会の史談会において、会長、副会長は重任、新に副会長を三名として中野敬次郎氏を選任。本年度の事務内掌は左の諸氏に依頼した。(敬称略)
事務局―橋本庄平・安部竜
職・奥水正光・松野光純
総務―東海俊美・勝野憲一
・浅見雲風・山田一郎・

杉山康輔。
財務―佐々木金治・広沢伊助・杉崎正五・片山文治
編集―養田長平・内田武雄
・立木望隆・清水専吉郎
額田喜代春。
以上

編集後記

▼去る六月二十日理事会において、社報編集委員五名が選定せられ、不肖私が委員長となつて苦しい立場に追い込まれました。八十四才の老態に何ができるかと皆さんのお叱りを受けるのは必条。私も一言の弁解もありませんが、選出された以上、文句は言えぬので不得手ながらお引受けいたしました。一年間は頑張つて、最後の奉仕をいたしたいと思ひます。

▼寄稿は前月末までにお送り下さい。なお兎角発行の遅れるのは、編集者が怠けているのではなく、印刷所の都合で引延ばされることになりました。この点ご諒承を願ひます。

▼本月号はページも増え、且つ発行日が迫まっているので、急いで編集に取りかかりました。不備の点はお許しを願ひます。内容の充実如何は、会員のご寄稿如何に依ることですから、今後有益な且つ興味ある資料をどしどしお寄せ下さるようお願いいたします。

▼それに、範囲を拡めて、全国にわたつて未だ発表されない珍談奇聞も少からぬことと思ひます。当市在住者は市内出身の人ばかりではありません。各国から集まった人が多数を占めています。お国自慢もさることながら、未だ誰も知らぬ珍らしいことを知つておられる方もあるかと思ひます。そんなことは可成所廻りどころを明かにして発表していただきたいものです。

▼編集は一つの技術であり芸術であります。人知れぬ苦勞もあります。老骨の私には永續性のいかにを恐れています。幸い編集委員として五人選定されましたので、今後は交代制でやっつてはと考えています。その方が出来栄にもそれぞれの特色があり、却て興味深いかと思ひますが、どうでしょう。皆さんのお考えは、▼史談会の経費もたく不足勝ちでやりくりしておるようです。会員にして本年内(一ヶ月三十円一年三百六十円)未払いの方はどうかこの際御払込み下さいやはり活動するには資金が伴うので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。腹が減つては軍さでござせんので。

▼極暑の折柄、皆さんのご自愛を祈り上げます。海に山に一日の清遊も妙。家族連れのお出かけも結構。俗化した温泉場を避けて、閑静なところに弁当をつつてお互が隔意なく話し合つて平生のうづぶん(?)を晴らすのも結構です。なにしる炎熱の際は可成休養をとつてのんきになつてくらしたいものです。

(七月一日記養田生)

小田原信用金庫

本店 小田原市幸一丁目
電話(局番)〇五二二
支店 十字町支店
小田原市十字二丁目
緑町支店
小田原市緑二丁目
湯本町支店
湯本町 湯本
国府津支店
小田原市国府津

セトモノの御用は
(陶磁器・陶管・植木鉢)

大川商店
TEL 8513・3055

日本銘菓指定店
神奈川県指定銘菓店

山口菓子舗

井細田店 TEL 2215
小田原駅前店
箱根湯本店 " 5641

清水印刷

印刷の御用は
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七

各種竹製品製造卸
干梅発売元

中島観光物産商会

小田原市幸3~485
TEL 50159

<p>高級陶器の店 小田原市緑1~103 小田原銀座通り 株式会社 江島屋陶舗 TEL(0465)5427</p>	<p>甘露梅 月の衣 小田原駅前 正栄堂菓子舗 電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店 花田屋 小田原銀座2 電話 3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う カメラの光輝堂 小田原駅前 TEL 5965 4859</p>
--	---	--	---

<p>東海化成株式会社 取締役社長 瀧本友信 電話 小田原五九二七番</p>	<p>資生堂ホールセール(特契店) ベルマン、パピリオドール、マ ナー、キャロン婦人靴下代理店 有限会社 山一商店 小田原市井細田428 電話 3553</p>	<p>建築金物 家庭金物 株式会社 星崎仲吉商店 小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>畳表・日用品 問屋 茶利商店 小田原市多古25 電話2341・2374</p>
--	---	---	---

<p>御料理仕出し 御弁当 株式会社 東華軒 代表取締役 飯沼相三郎 小田原駅前 TEL(0465)5061~2</p>	<p>純良医薬品 株式会社 オタワラ薬局 錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華 松屋 小田原錦通り 電話三三三三六</p>	<p>銘菓 松風 千代菊 銘菓 甘露梅 銘菓(県指定の店) 電話 2376 集栄堂本店</p>
---	---	--	--

<p>平野商会 平野久雄 小田原市十字三 電話(〇四六五)二四四九番</p>	<p>写真 イガラシ 小田原市幸3 TEL2534番</p>	<p>趣味の陶器 江島屋 小田原箱根口 電話6602</p>	<p>志澤 TEL3131</p>
---	---	---	------------------------------

<p>印刷物は 弘英印刷 小田原市井細田八一 電話四、一〇八番</p>	<p>楽しい生活 明るい読書 八小堂 小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社 代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社 大雄山線 運営事務所</p>
--	---	---	---

<p>あなたの洋品店 はふや 小田原幸町 TEL2307</p>	<p>株式会社 小田原百貨店 社長 神戸英次郎</p>	<p>きそば庵 小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>松坂屋製菓本舗 小田原市十字二 電話五二七六番</p>
---	--	--	--